

看護大学生の志望動機および職業観が学習困難感に与える影響

The influences of motivation for applying and vocational views on learning difficulties among undergraduate nursing students

植田可織¹⁾, 田村良次¹⁾, 眞鍋航平¹⁾, 藤本智裕¹⁾, 陳 容¹⁾,
井本千代香¹⁾, 勝原優子¹⁾, 中田由紀子¹⁾, 山下清可¹⁾, 山田英里¹⁾,
弘津公子²⁾, 徳田和央²⁾, 長谷川真司²⁾, 水藤昌彦²⁾, 吉村耕一²⁾

UEDA Kaori¹⁾, TAMURA Ryoji¹⁾, MANABE Kouhei¹⁾, FUJIMOTO Tomohiro¹⁾, CHEN Rong¹⁾,
IMOTO Chiyoka¹⁾, KATSUHARA Yuko¹⁾, NAKATA Yukiko¹⁾, YAMASHITA Kiyoka¹⁾, YAMADA Eri¹⁾,
HIROTSU Kimiko²⁾, TOKUDA Kazuhiro²⁾, HASEGAWA Masashi²⁾, MIZUTO Masahiko²⁾, YOSHIMURA Koichi²⁾

- 1) 山口県立大学大学院健康福祉学研究科博士前期課程
- 2) 山口県立大学大学院健康福祉学研究科

- 1) Masters Program, Graduate School of Health and Welfare, Yamaguchi Prefectural University
- 2) Graduate School of Health and Welfare, Yamaguchi Prefectural University

抄録

看護大学生には、高い実践能力の獲得が求められており、学習困難感を抱いている者は少なくないが、その学習困難感と志望動機あるいは職業観との関連は明らかになっていない。本研究では、看護大学生の志望動機および職業観が学習困難感に与える影響を明らかにすることを目的として、看護学科の学生を対象とした質問紙調査を実施し、得られた92件の回答を分析対象とした。その結果、志望動機が「他者の勧め」であった学生には講義内容の理解に困難を感じる者が多かった。また、職業観について「看護職は理想の人物像になれる職業である」と回答した学生では、学業と私生活の両立に困難を感じていない者が多かったが、その一方で、学外実習の減少に伴い実務的技術の習得に困難を感じる者が多かった。今後は、学習困難感の背景にある志望動機と職業観に着目した上で、学習支援の方策を検討していく必要があることが示唆された。

キーワード:看護大学生、志望動機、職業観、学習困難感

Abstract

Undergraduate nursing students are required to acquire practical skills, and many of them may experience learning difficulties. However, the relationship between learning difficulties and motivation for pursuing nursing or vocational views remains unclear. In this study, a questionnaire was administered to 92 undergraduate nursing students to determine the influences of their motivation for pursuing nursing and vocational views on learning difficulties. Our results showed that students whose motivation for applying was “because someone recommended me” had difficulty understanding the lecture content. Those who answered “yes” to the item “a career in nursing would help me become my ideal self” found it difficult to acquire practical skills because of fewer opportunities but did not have difficulty balancing their academic and personal lives. Our findings suggest the need to consider measures to support nursing students’ learning by focusing on the motivation for applying for nursing and the vocational views on their learning difficulties.

Key words: undergraduate nursing student, reason for applying, vocational view, learning difficulties

I 背景

少子高齢社会、保健医療の高度化・複雑化などを背景に、看護職に求められる社会的なニーズは一層高まっている。これに伴い、2017年に策定された「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」において、看護大学生は多様なニーズに対応できる高い看護実践能力を獲得する必要があることが示された（大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会2017）。看護大学生には、専門的な知識を修得する座学に加え、看護技術や問題解決能力を学ぶ臨地実習などの多くの学習課題が課せられていることから、学習に困難感を抱いている者が一定の割合で存在する可能性は高い。さらに2019年以降は、コロナ禍における行動制限に伴って臨地実習の中止やオンライン授業の導入などの措置が行われているため、その学習環境の変化に対して、新たな学習困難感を抱いている学生は少なくないと推測される。看護大学生の学習意欲・学習行動に志望動機あるいは職業観が関係することが示唆されているが（吉澤ら2021、古川ら2016）、志望動機や職業観と学習困難感との直接の関連については明らかになっていない。そこで本研究では、コロナ禍における看護大学生の学習困難感が志望動機あるいは職業観の影響を受けている可能性を明らかにすることとした。

II 研究目的

本研究は、看護大学生の志望動機および職業観が学習困難感に与える影響を明らかにすることを目的とした。これにより、学習に困難を抱える看護大学生への支援策を検討するための知見を得ることを目指した。

III 研究方法

1. 調査対象者と調査内容

2019年度から2021年度までに山口県立大学看護学科に入学した学生（調査時に2年生から4年生）を対象として、2022年7月に質問紙調査を実施した。看護学生の志望動機と職業観、学習困難感に関連する以下の

- (1) ～ (5) の質問を設定し、選択肢で回答を求めた。
- (1) 基本属性:性別、年齢、入学年度
- (2) 志望動機 (1問)
- (3) 新型コロナウイルス感染症の流行が看護職を目指すきっかけの1つになったか否か (1問)
- (4) 現在の職業観 (1問、8項目)
- (5) 学習困難感 (1問、8項目)

質問 (2) 志望動機の項目は、看護大学生の職業志望動機とストレス（大島ら2017）を参考に作成した。質問 (4) 現在の職業観の項目は、新人看護師の仕事観の

特徴（村上ら2008）を参考に作成した。質問 (5) 学習困難感の項目は、2年課程看護専門学校学生が学習上直面する問題（垣上ら2016）を参考に作成した。

2. 分析方法

基本属性（年齢、性別、入学年度）および各質問について、単純集計を行なった。志望動機について、「人の役に立ちたいから」と「社会に貢献したいから」を『他者貢献』、「やりがいのある仕事だから」、「魅力のある仕事だから」と「自分または周囲の人が看護を受けた経験があるから」を『看護志向』、「知人や家族に看護職がいたから」と「親や知人に勧められたから」を『他者の勧め』、「安定した収入が得られるから」と「資格職であり長く働き続けられるから」を『経済的価値』、「なんとなく」を、『なんとなく』という5つのカテゴリーに分類した。さらに、『他者貢献』と『看護志向』を「積極的理由」、『他者の勧め』、『経済的価値』と『なんとなく』を「積極的とは言えない理由」に大別した。

職業観について、各質問項目で「はい」の回答を1点、「いいえ」の回答を0点とした点数の合計点を算出した。ただし、項目8「看護職に対してイメージできることは全くない」のみ、「いいえ」と回答した者を1点、「はい」と回答した者を0点とした。合計点数が平均値を上回った対象者を「ポジティブな職業観」を持つ者、下回った対象者を「ネガティブな職業観」の者とし、2群間の比較を行なった。学習困難感には4件法で実施し、「全く思わない」を0点、「あまり思わない」を1点、「ややそう思う」を2点、「非常にそう思う」を3点として合計点を算出した。合計点数が平均値を上回る対象者を「学習困難感が強い」群、平均を下回る対象者を「学習困難感が弱い」群とし、2群間の比較を行なった。また、各項目において、「全く思わない」または「あまり思わない」を『思わない』、「ややそう思う」または「非常にそう思う」を『思う』の2つに大別した。2群間の比較は、クロス集計を行い、 χ^2 乗検定およびフィッシャーの直接確率検定を用いて関連性を検証した。統計解析にはSPSS Statistics 29を用い、有意水準を5%とした。

3. 倫理的配慮

本研究は、山口県立大学生命倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 2022-12）。調査対象者には、研究目的、調査協力は任意であること、回答を拒否した場合でも不利益を受けないこと、得られたデータは本研究以外に使用しないこと、個人情報の保護等につ

いて、紙面（質問紙）および口頭で説明した。質問紙の投函をもって同意を得たものとした。なお、本研究に関連して開示すべき利益相反はない。

IV 結果

1. 調査対象者の基本属性

調査票配布数135枚、回収数124枚（回収率91.9%）、有効回答は92枚（有効回答率は68.7%）であり、有効回答

表1. 対象者の基本属性

基本属性	項目	n (%)
性別	男	1 (1.1)
	女	91 (98.9)
	計	92 (100.0)
年齢	19歳	25 (27.2)
	20歳	22 (23.9)
	21歳	33 (35.9)
	22歳	12 (13.0)
	計	92 (100.0)
入学年度	2019年度	30 (32.6)
	2020年度	30 (32.6)
	2021年度	32 (34.8)
	計	92 (100.0)

92枚を分析対象とした。性別は男性1名（1.1%）、女性91名（98.9%）であった。年齢は19歳25名（27.2%）、20歳22名（23.9%）、21歳33名（35.9%）、22歳12名（13.0%）であった。入学年度は2019年度30名（32.6%）、2020年度30名（32.6%）、2021年度32名（34.8%）であった（表1）。

2. 各質問項目（Ⅱ.志望動機、Ⅲ.新型コロナウイルス感染症流行の志望動機への影響、Ⅳ.職業観、Ⅴ.学習困難感）の単純集計結果

志望動機は、「資格職であり長く働きつづけられるから」が16名（17.4%）と最も多かった。次に「人の役に立ちたいから」15名（16.3%）、「魅力のある仕事だから」15名（16.3%）であった（表2）。「新型コロナウイルス感染症の流行はあなたが看護職を目指すきっかけの1つになりましたか」という質問に対して、「はい」と回答した者は4名（4.3%）、「いいえ」と回答した者は88名（95.7%）であった（表3）。

職業観については、項目1「看護職は、やりがいがある職業である」に「はい」と回答した者は90名（97.8%）、項目2「看護職は、人のために役に立つことができる職業である」に「はい」と回答した者は92名（100%）、項目5「看護職は、自身の成長や自己実現につながる職業である」に「はい」と回答した者は86名（93.5%）、項目6「看護職は、社会的に貢献

表2. 対象者の志望動機

志望動機 (n=92)		n (%)	
積極的理由	他者貢献	人の役に立ちたいから	15 (16.3)
		社会に貢献したいから	1 (1.1)
	看護志向	やりがいのある仕事だから	10 (10.9)
		魅力のある仕事だから	15 (16.3)
		自分または周囲の人が看護を受けた経験があるから	6 (6.5)
積極的とはいえない理由	他者の勧め	知人や家族に看護職がいたから	11 (12.0)
		親や知人に勧められたから	5 (5.4)
	経済的価値	安定した収入を得られるから	11 (12.0)
		資格職であり、長く働き続けられるから	16 (17.4)
	なんとなく	なんとなく	2 (2.2)

表3. 対象者の新型コロナウイルス感染症の志望動機への影響の有無

新型コロナウイルス感染症の影響	はい n (%)	いいえ n (%)
新型コロナウイルス感染症の流行はあなたが看護職を目指すきっかけになったか	4 (4.3)	88 (95.7)

できる職業である」に「はい」と回答した者は92名（100%）、項目7「看護職は、魅力的な職業である」に「はい」と回答した者は79名（85.9%）、項目8「看護職に対してイメージできることは全くない（逆転項目）」に「いいえ」と回答した者は91名（98.9）であり、これらの質問項目では回答結果が偏っていた。対して、項目3「看護職は理想の人物像になれる職業である」に「はい」と回答した者が56名（60.9%）、「いいえ」と回答した者が36名（39.1%）、項目4「看護職は仕事に見合った十分な収入を得られる職業である」に「はい」と回答した者が33名（35.9%）、「いいえ」と回答した者が59名（64.1%）と、回答結果が

表4. 対象者の現在の職業観

職業観	はい n (%)	いいえ n (%)
1. 看護職は、やりがいのあり職業である	90 (97.8)	2 (2.2)
2. 看護職は、人のために役に立つことができる職業である	92 (100.0)	0 (0)
3. 看護職は、理想の人物像になれる職業である	56 (60.9)	36 (39.1)
4. 看護職は、仕事に見合った十分な収入が得られる職業である	33 (35.9)	59 (64.1)
5. 看護職は、自身の成長や自己実現につながる職業である	86 (93.5)	6 (6.5)
6. 看護職は、社会的に貢献できる職業である	92 (100.0)	0 (0)
7. 看護職は、魅力的な職業である	79 (85.9)	13 (14.1)
8. 看護職に対してイメージできることは全くない	1 (1.1)	91 (98.9)

表5. 対象者が感じている学習困難感

学習困難感	困難 n (%)	困難とは思わない n (%)
(1) 講義の内容理解	52 (56.5)	40 (43.5)
(2) 私生活と学業の両立が難しく学習時間が取れない	44 (47.8)	48 (52.2)
(3) 思うように成績が伸びない	44 (47.8)	48 (52.2)
(4) 演習の担当教員との関係形成	52 (56.5)	40 (43.5)
(5) 演習における他の学生との関係形成	61 (66.3)	31 (33.7)
(6) 実習における対人援助	42 (45.7)	50 (54.3)
(7) オンラインという授業形式	65 (70.1)	27 (29.3)
(8) コロナ禍において学外実習の機会が減少したことによる実務的な技術の習得	42 (45.7)	50 (54.3)

多少分かれた（表4）。

学習困難感に関する質問では、項目1「講義の内容について理解が難しいと感じる」、項目2「私生活と学業の両立が難しく学習時間が取れないと感じる」、項目3「思うように成績が伸びないと感じる」、項目4「演習の担当教員との関係形成が難しいと感じる」、項目6「実習において対人援助が難しいと感じる」、項目8「コロナ禍において学外実習の機会が減ったことで実務的な技術の習得に困難を感じる」においては、「思う」と回答した者と「思わない」と回答した者がほぼ半々であった。項目5「演習において他の学生との関係形成が難

しいと感じる」に「思う」と回答した者は61名（66%）、
「思わない」と回答した者は31名（34%）であった。項目7「オンラインという授業形式に困難を感じる」に、「思う」と回答した者は65名（71%）、「思わない」と回答した者は27名（29%）であり、これらの項目では困難感を感じている学生がやや多かった（表5）。

3. 職業観と学習困難感の分析結果

職業観に関する質問の項目3「看護職は理想の人物像になれる職業である」に「いいえ」と回答した36名のうち、学習困難感に関する質問の項目2「私生活

と学業の両立が難しく学習時間がとれない」に「思う」と回答した者が24人（66.7%）と、有意に多かった（ $p=0.026$ ）（表6）。職業観に関する質問の項目3「看護職は理想の人物像になれる職業である」に「はい」と回答した56名では、学習困難感に関する質問の項目8「コロナ禍において学外実習の機会が減ったことで実務的な技術の習得に困難を感じる」に「思う」と回答した者が35名（62.5%）と、多い傾向にあった（ $p=0.050$ ）（表7）。

表6.「看護職は理想の人物像になれる職業である」という職業観と「私生活との両立が難しく学習時間がとれない」という学習困難感との関連性

		(2)私生活との両立が難しく学習時間がとれない		合計 (n=92) n (%)	p 値
		思う n (%)	思わない n (%)		
3. 看護職は理想の人物像 になれる職業である	はい	24 (42.9)	32 (57.1)	56 (100.0)	0.026
	いいえ	24 (66.7)	12 (33.3)	36 (100.0)	
合計		48 (52.2)	44 (47.8)	92 (100.0)	

表7.「看護職は理想の人物像になれる職業である」という職業観と「コロナ禍において学外実習の機会が減ったことで実務的な技術の習得に困難を感じる」という学習困難感との関連性

		(8)コロナ禍において学外実習の機会が減ったことで実務的な技術の習得に困難を感じる		合計 (n=92) n (%)	p 値
		思う n (%)	思わない n (%)		
3. 看護職は理想の人物像 になれる職業である	はい	35 (62.5)	21 (37.5)	56 (100.0)	0.050
	いいえ	15 (41.7)	21 (58.3)	36 (100.0)	
合計		50 (54.3)	42 (45.6)	92 (100.0)	

表8. 志望動機の積極性と「講義の内容について理解が難しいと感じる」という学習困難感との関連性

		(1)講義の内容について理解が難しいと感じる		合計 (n=92) n (%)	p 値
		思う n (%)	思わない n (%)		
志望動機	積極的理由	14 (29.8)	33 (70.2)	47 (100.0)	0.007
	積極的とは言えない理由	26 (57.8)	19 (42.2)	45 (100.0)	
合計		40 (43.5)	52 (56.5)	92 (100.0)	

4. 志望動機と学習困難感の分析結果

志望動機が「積極的理由」であった47名のうち、学習困難感に関する質問の項目1「講義の内容について理解が難しいと感じる」に「思わない」と回答した者が33名（70.2%）と有意に多かった（ $p=0.007$ ）（表8）。一方で、志望動機が「他者の勧め」であった16名では、学習困難感に関する項目1「講義の内容について理解が難しいと感じる」に「はい」と回答した

者が12名（75.0%）と有意に多かった（ $p=0.005$ ）（表9）。

5. 志望動機と職業観の分析結果

志望動機が「看護志向」であった31名のうち、職業観が「ポジティブ」である者は25名（80.6%）と多い傾向にあった（ $p=0.067$ ）（表10）。また、志望動機が「積極的理由」であった47名のうち、職業観が「ポ

表9. 「他者の勧め」という志望動機と「講義の内容について理解が難しいと感じる」という学習困難感との関連性

		(1)講義の内容について理解が難しいと感じる		合計 (n=92) n (%)	p 値
		思う n (%)	思わない n (%)		
志望動機が「他者の勧め」	はい	12 (75.0%)	4 (25.0%)	16 (100.0%)	0.005
	いいえ	28 (36.8%)	48 (63.2%)	76 (100.0%)	
	合計	40 (43.5)	52 (56.5)	92 (100.0%)	

表10. 各志望動機と「職業観がポジティブかネガティブか」との関連性

		職業観		合計 (n=92) n (%)	p 値
		ポジティブ n (%)	ネガティブ n (%)		
志望動機	他者貢献	11 (68.8)	5 (31.3)	16 (100.0)	0.067
	看護志向	25 (80.6)	6 (19.4)	31 (100.0)	
	他者の勧め	9 (56.3)	7 (43.8)	16 (100.0)	
	経済的価値	15 (55.6)	12 (44.4)	27 (100.0)	
	なんとなく	0 (0.0)	2 (100.0)	2 (100.0)	
	合計	60 (65.2)	32 (34.8)	92 (100.0)	

表11. 志望動機の積極性と「職業観がポジティブかネガティブか」の関連性

		職業観		合計 (n=92) n (%)	p 値
		ポジティブ n (%)	ネガティブ n (%)		
志望動機	積極的理由	36 (76.6)	11 (23.4)	47 (100.0)	0.019
	積極的とは言えない理由	24 (53.3)	21 (46.7)	45 (100.0)	
	合計	60 (65.2)	32 (34.8)	92 (100.0)	

ジティブ」な者は36名（76.6%）と有意に多かった（ $p=0.019$ ）（表11）。

V 考察

本研究では、看護大学生への学習支援策を検討するために、看護大学生の志望動機および職業観が学習困難感に与える影響を明らかにするための調査を行なった。まず、職業観が学習困難感に与える影響に関する結果として、「看護職は理想の人物像になれる職業である」という職業観を有している学生では、「コロナ禍において学外実習の機会が減ったことで実務的な技術の習得に困難を感じる」と回答した者が有意に多かった（表7）。2020年に学研が実施した調査によると、目指す理想の看護師像として最も多く挙げられたものは「患者にやさしい」と「信頼できる」であった（学研ココファン2020）。これを踏まえると、「看護職は理想の人物像になれる職業である」と回答した学生は、学習においても対人的な関係構築を重要視していた可能性が高い。しかしながら、対人的な関係構築は、患者との関わりの中で実践し、患者の反応を通して学びとして実感する看護技術であるため、臨地実習の機会は重要である。実際、竹田らは、コロナ禍において基礎看護学実習を学内実習に代替した結果、臨地実習の経験がないまま患者を想像してケアを行なうことに、学生が限界を感じていたことを報告している（竹田ら2022）。感染症の流行などにより臨地実習が困難で、ペーパーペイシエント（紙上の症例を用いた看護演習）等を用いる学内実習を選択せざるを得ない場合では、心理面や患者背景などの設定を充実させ、患者心理に関する知識を有している教員が患者役となるなどの工夫を凝らして、リアリティのある対人援助を行なう機会を作ることが必要である。

一方で、「看護職は理想の人物像になれる職業である」という質問に「いいえ」と回答した学生では、「私生活と学業の両立が難しく学習時間がとれない」と感じている者が有意に多かった（表6）。多久島らは、看護師の職業コミットメント（個人の自己の職業に対する態度）の一部が学校教育を通して形成されること、志望動機や看護職への志向が入学後の学習動機や意欲に影響することを報告している（多久島2018）。また、室津らは、演習や実習がおもしろいと感じることができれば肯定的な看護師イメージになると報告している（室津ら2016）。すなわち、学習の有用性を感じ、演習や実習をおもしろいと感じることで看護の職業感が肯定的に変容する一方で、職業観を確立するこ

とで学習行動が高まることが、これらの先行研究から示唆されている。したがって、「看護職は理想の人物像になれる職業である」という質問に「いいえ」と回答した者への学習支援としては、実施した看護技術や患者から得られた反応に対して肯定的な評価を返すことと、学習の達成感を得られるような支援を行なうことにより、職業観並びに学習行動の変容に繋げることが有用であると考ええる。

次に、志望動機が学習困難感に与える影響に関する結果として、「積極的理由」の志望動機を有した学生では、「講義の内容について理解が難しいと感じる」という項目に「思わない」と回答した者が有意に多かった（表8）。先行研究において、志望理由が「医療関係の分野に興味があるから」であった者は学習意欲が有意に高いことが示されている（古川ら2016）。このことから、本調査における志望動機が積極的であった学生は高い学習意欲を有していた可能性があり、その結果として講義内容に関する困難感が低下したのではないかと推察される。

一方で、志望動機が「他者の勧め」の学生では、「講義の内容について、理解が難しいと感じる」という項目に「思う」と回答した者が有意に多かった（表9）。泉澤らによると、看護大学生の学習継続のための動機づけとしては、興味関心といった一般的な動機づけではなく、職業上における価値と自分の価値観の一致に基づく学習の動機づけが最も重要である（泉澤ら2021）。すなわち、職業観の観点からの動機づけが必要と言える。実際、本調査において、志望動機が「他者の勧め」であった学生では、その約半数の職業観が「ネガティブ」であり（表10）、志望動機が「積極的とは言えない理由」の学生でも、「ネガティブ」な職業観を持つ者が多かった（表11）。これらのことから、「他者の勧め」等の「積極的とは言えない理由」で入学した学生に対しては、看護という職業上の価値や、その価値に裏付けされた充実感を感じられるような学習支援を行なうことで動機づけを行い、学習意欲を向上させることが必要と考ええる。

最後に、本研究における学習困難感の設問項目の中で、「演習において他の学生との関係形成が難しいと感じる」と「オンラインという授業形式に困難を感じる」という項目では、全体の2/3以上の学生が「はい」と回答していた。コロナ禍以前と比較したわけではないが、コロナ禍における行動制限やそれに追従した授業形式の変更等の影響を受けた結果と考えられる。すなわち、新型コロナウイルス感染症の流行は、看護

大学生の学習困難感にも一定の影響を及ぼしていたことが示唆された。なお、新型コロナウイルス感染症の世界的流行を契機に看護職に期待される社会のニーズが高まっていることから(阿南2022)、社会的情勢を踏まえてより高い志望動機で入学した学生の学習困難感の状況についても本研究で明らかにしたかったが、「新型コロナウイルス感染症の流行は看護職を目指すきっかけの1つになった」者が4名(4.3%)にとどまり(表3)、その分析は叶わなかった。

VI 結論

看護大学生を対象として質問紙調査を実施し、看護大学生の志望動機および職業観が学習困難感に影響を及ぼすことを明らかにした。具体的には、志望動機が「積極的理由」であった学生では講義内容の理解に困難を感じていない者が多く、志望動機が「他者の勧め」であった学生には講義内容の理解に困難を感じる者が多かった。また、職業観について「看護職は理想の人物像になれる職業である」と回答した学生では、学業と私生活の両立に困難を感じていない者が多かったが、その一方で、学外実習の減少に伴い実務的技術の習得に困難を感じる者が多かった。今後は、学習困難感の背景にある志望動機と職業観に着目した上で、学習支援の方策を検討していく必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました山口県立大学看護栄養学部看護学科の2~4年生の皆様、教員の方々に厚くお礼申し上げます。

なお、本研究の立案、調査、実施、データ解析ならびに論文執筆について、植田、田村、眞鍋、藤本、陳は同等に貢献した。

文献

阿南英明:「新型コロナウイルス感染症の医療提供体制の振り返りと将来展望—神奈川県を取り組みを中心に—」.保健医療科学 71 (4), 324-334, 2022.

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会:看護学教育モデル・コア・カリキュラム~「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標~, 2017.

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf (2022年12月18日アクセス)

古川秀敏, 小出水寿英, 山口恭平, 西垣里志, 門脇千恵:看護系大学生の学習意欲に影響を及ぼす要因—看護師の理想イメージ、看護学生の自己イメージ、志望動機、希望進路の観点から—.関西看護医療大学紀要 8 (1), 27-35, 2016.

学研ココファン:みんなが目指す理想の看護師とは? 面接での伝え方や小論文での書き方についても紹介, 2020.

<https://www.cocofump.co.jp/articles/kango/581/> (2022年12月19日アクセス)

泉澤真紀, 栗田克実:看護大学生の学習継続のための学習意欲・動機づけに関する研究. 旭川大学保健福祉学部紀要 13, 23-29, 2021.

垣上正裕, 松田安弘:2年課程看護専門学校学生が学習上直面する問題. 群馬県立県民健康科学大学紀要 11, 81-95, 2016.

村上美華, 前田ひとみ:新人看護師の仕事観の特徴. 熊本大学医学部保健学科紀要 4, 107-112, 2008.

室津史子, 重本津多子, 羽山美和, 友安由貴子, 今村美幸:学年進行に伴う看護学生の看護イメージおよびキャリアコミットメントの変化. 健康科学と人間形成 2 (1), 55-63, 2016.

大島和子, 福島和代:看護大学生の職業志望動機とストレス. 心身健康科学 13 (2), 62-71, 2017.

竹田理恵, 佐藤由記子, 佐藤清湖, 菅原尚美, 伊藤てる子:COVID-19 感染拡大下における 基礎看護学実習Ⅱの取り組み (第2報) —バイタルサイン測定を含めた一般状態の観察における学生の学び—. 研究紀要青葉 Seiyō 14 (1), 85-92, 2022.

多久島寛孝, 羽田野花美:看護大学生の職業コミットメントと学習支援. 保健科学研究誌 Journal of Health Sciences 8, 23-30, 2018.

吉澤裕子, 山口さつき, 山田直行:看護学生の学年別看護師イメージとキャリアコミットメントの変化. 旭川大学保健福祉学部研究紀要 13, 5-13, 2021.